

【暗唱聖句】第一コリント 10:6 「これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。彼らが悪をむさぼったように、わたしたちが悪をむさぼることのないために」

【今週のポイント】

【日曜日・モーセに属するものとなる洗礼】

第一コリント 10:1~5 「…わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなる洗礼を授けられ、皆、同じ霊的な食物を食べ、皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らが飲んだのは、自分たちに離れずについて来た霊的な岩からでしたが、この岩こそキリストだったのです。」

イスラエルの民は、モーセと共に、雲の中、海の中を通して、無事にエジプトを脱出しました。それらは霊的にバプテスマを意味していました。新しく生まれ変わったのです。その後、皆、同じ霊的な食物を食べ、霊的な飲み物を飲みました。水を噴き出した岩は、キリストを象徴していました。つまり、キリストはずっと守り導いて下さっていたということです。しかし、とパウロは続けます。

第一コリント 10:5、6 「しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒野で滅ぼされてしまいました。これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。彼らが悪をむさぼったように、わたしたちが悪をむさぼることのないために」

歴史は繰り返されると言いますが、過去の経験から学ぶことは大切です。パウロは、イスラエルの出エジプトにおける経験は、私たちに戒める前例、すなわち教訓として起こったのだと理解しました。良い前例もありましたし、悪い前例もありました。良い前例は、食べ物が無い荒野で神様はマナを降らせ、イエス様を象徴する岩から水を噴き出させ、常に民と共にいて導いて下さいました。そして、安息日を休むことを教えて下さいました。しかしながら、悪い前例も数多くありました。彼らは不信仰によりカナンに入ることができず、荒野での生活に不平不満を募らせました。パウロは、「彼らは悪をむさぼった」と言っています。むさぼるとは、際限なく飽きことなく、悪いことを求め、悪い行為をし続けたということです。またこの聖書の出来事は、現代に生きる私たちに対する教訓でもあります。

【月曜日・儀式と犠牲】

荒野での経験が前例となっていたわけですが、同様に旧約時代の様々な儀式や犠牲も、新約聖書の真理を指示しています。例えばレビ記 4:32~35 にかけて「羊を贖罪の献げ物とする場合は、無傷の雌羊を引いて行く。奉納者が献げ物の頭に手を置き、焼き尽くす献げ物を屠る場所で贖罪の献げ物として屠ると、祭司は献げ物の血を指につけて、焼き尽くす献げ物の祭壇の四隅の角に塗り、残りの血は全部、祭壇の基に流す…」など細かく儀式の捧げ方が書かれてあり、最後に「祭司がこうして彼の犯した罪を贖う儀式を行うと、彼の罪は赦される」と教えられています。現代教会において羊を本当に屠り、血を流すということはしません。それは捧げられた羊はイエス・キリストを象徴しているからです。イエス・キリストが十字架で血を流し、私たちの罪を贖って下さったことで、私たちの罪は赦されることになりました。このような形で、旧約の犠牲制度が新約とつながっていきます。

【火曜日・休みの実例】

ヘブル 4:1 「だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、取り残されてしまったと思われる者があなたがたのうちから出ないように、気をつけましょう」

安息日は天地創造の際に定められ、十戒において明文化されました。これは当然、旧約時代だけのものではなく、新約時代の人々にも有効です。神様の安息に預かれるというのは、本当に素晴らしい恵みであり、経験です。ところが、神様の安息に自分は預かれず、取り残されてしまうのではないかと思う人が出てくることをパウロは注意しています。

「気をつけましょう」と訳されている言葉は、「恐れましょう」という強い意味が込められた言葉です。なぜならば、これは福音であり、取り残されると思うのは不信仰から出てくるからです。パウロは次のように続けます。

ヘブル 4:2、3「**というのは、わたしたちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。4:3 信じたわたしたちは、この安息にあずかることができるのです**」

神様の安息に預かることができるというのは福音であり、信仰によって結びつくことではじめ安息を預かることができます。

【水曜日・心をかたくなにしてはならない】

パウロは、ヘブル 4:5 で「**彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない**」と詩篇 95:11 の御言葉を引用しています。なぜ神様は荒野で多くのイスラエルの人々を安息に預からせなかったのでしょうか。詩篇 95 篇 8～11 節に次のように書かれてあります。

詩編 95:8～11「**あの日、荒野のメリバやマサでしたように心を頑にしてはならない。95:9 あのとて、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。95:10 四十年の間、わたしはその世代をいとい、心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。95:11 わたしは怒り、彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った。**」

安息に預かることができなかつた人の特徴は、火の柱・雲の柱に守り導かれ、紅海の海を渡り、荒野では天からマナが降りてくるのを見たにも関わらず、心が頑なで、何度も神様を試みたことでした。例えば、マサ（試し）とメリバ（争い）では、のどが渴いたといつて神様に不平を言い試みたのでした（出エジプト 17:1～7）。神様はこのよつな人たちを、「心の迷う民」と呼びました。心が迷っているうちは、安息はありません。だからこそ、安息に預かりたければ心を頑なにしてはならないとパウロは言うわけですが、その際に、「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心をかたくなにしてはならない」（ヘブル 4:7）と、「今日」という日を強調しています。明日に延ばすなということですが、しかも、その今日という日も、「神がある日を「今日」と決めて」（ヘブル 4:7）と言われており、神様が私たちに語りかける今日という日を、軽く考へてはならないことが分かります。

【木曜日・天の都を攻めとる】

パウロは、「**それで、安息日の休みが神の民に残されているのです**」（ヘブル 4:9）と言っていますが、神の民とは誰のことを指すのでしょうか。ガラテア 3:26～28 に「**あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです**」とあります。信仰によってキリストに結ばれている人は皆、神の子です。従つて、イスラエルの民に与えられた安息日の教へは、全世界に広がつて、神様を信じる人々のものとなつたのです。しかし、パウロは神の安息に預かる特権は残されていますが、安息に預かるためには努力が必要だとも言っています。

ヘブル 4:11「**だから、わたしたちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。さもないと、同じ不従順の例に倣つて墮落する者が出るかもしれません**」

これは安息に預かることが難しいというよりも、せつかく預かつた安息から不従順によって墮落してしまう恐れがあるからです。